

出題意図（サンプル問題 前期・小論文）

多文化社会学部のアドミッションポリシーにおいて、前期日程における小論文では「世界の多文化状況を客観的に捉え、見出された課題の解決に向けて論理的に思考できる」能力を特に評価する。また、自らの考えを整理し、表現できるライティング能力に加えて、「世界の多文化状況や異文化交流に興味・関心を持ち、グローバルな視点で自ら学ぼうとする意欲がある」能力も重視される。

現代世界の多文化状況や異文化交流に対する理解については、そのポジティブな側面だけではなくネガティブな要因に対する深い洞察が求められる。よりよい多文化社会の実現にとって障壁となる諸問題をどう解決するかという実践的な課題に取り組むためには、その根底にある諸要因の複雑な連関を読み解く必要があるからである。

そのような意味において「人種差別」は示唆的なテーマである。人種差別は、異文化交流の大きな障壁であると同時に、多文化社会における深刻なリスク要因でもある。しかし、いまだ存在し続けていることを見ればわかるように、それは根深く簡単に解決できる問題でもない。歴史的に見れば、その成立の背後には、経済・政治・宗教・科学などのさまざまな要素が多層的に関係してきた。それは現代社会を構成する様々な問題の結果でもあり、原因でもある。このテーマを扱う上では、それを単に倫理的問題として片づけるのではなく、人種差別が社会のなかにどのように埋め込まれており、再生産されるのかを幅広い視野においてとらえなければならない。このような問題をあつかうことで、この小論文では、多文化社会に対する興味・関心と答えのない問いに向き合う粘り強い思考力を測る。

本問題で取り上げる二つの文章は、人種をめぐる宗教と科学の関係と人種差別の言説にみられる特徴について論じたものである。いずれも、客観的な装いをもった言説の中に、いかにして人種差別主義が忍び込むかという問題を扱っている。一つ目の設問において「二重の差別意識」を読み取らせる意味は、二つの文章が人種差別の本質をいかなるものとしてとらえようとしているかを、両者をつなげる形で読み取らせることを意図している。その上で、その主張をどれだけ相対化し、自らの意見を論じられているかを評価する。また、二つ目の設問では、人種差別以外の例をあげさせることで、どれだけ世界の多文化状況や異文化交流に興味・関心があるかを測る。また、一つの事象を異なる事象と関連付け、そこに共通する要素を大胆に探り出してもらうことで、批判的・論理的な思考力について評価する。さらに、題目全体を自身で設定してもらうことで、それが論述全体の一貫した論旨を的確に表すものとなっているかどうかを確認する。

※ 尚、問題の分量や設問数は変更される可能性があります。また文章だけでなく図表や画像を入れることもあります。